

注目大学の秘密に迫る 宮崎国際大学 —教育学部開設10年、対策の徹底で 合格率100%を達成—



宮崎国際大学
福田亘博副学長
兼教育学部長

宮崎市郊外、旧清武町の高台にある私立宮崎国際大学は、以前は国際教養学部だけの単科大学だったが、授業を英語で行う大学として全国的に注目を集めた。その大学が新たに教育学部をつくって10年。少人数教育とともに徹底した採用試験対策を打ってきた。その結果、昨年度実施の採用試験では、公立小学校の受験者24人全員が合格した。入学定員50人の学部で快挙と言えるだろう。副学長で教育学部長の福田亘博さんらに話を聞くとともに、対策講座をのぞかせてもらった。

「協同出版・教職課程レポート」編集長・中西 茂

国際教養学部の評価

宮崎国際大学は1994年に開学した。当初の学部名は比較文化学部だったが、2006年に国際教養学部と改称している。

筆者は改称の前後に、同大学のことを知った。当時勤務していた読売新聞の、筆者がまとめ役をやっていた長期連載「教育ルネサンス」で、2007年に同大併設の宮崎女子短大（2008年に宮崎学園短大に改称）を、2008年には宮崎国際大学を取り上げていたからだ。

前者の記事では「『日本一の地方短大』を目標に掲げて、教職員60人全員がF/Dに取り組む」様子を紹介した。後者の記事では「短期海外留学を必修としている」「日本ではじめて全授業を英語で行ったことで知られる」「教員34人中27人が外国人教員で、学生は英語漬けの毎日だ」などと記している。

宮崎国際大学の外国人教員比率は、現在も秋田県の国際教養大学に次ぐ2位（朝日新聞出版編『大学ランキング2024、規模別＝学生数1000人未満』）となっている。世界的な大学評価をしているTHE(Times Higher Education)の日本大学ランキング(2023)でも、「国際性」で5位に入っている。

国際教養学部では、真の国際人を育てるために少人数教育を徹底する方針も、開設時から変わっていない

いようだ。文部科学省の大学教育再生加速プログラム(AP)にも採択された大学のひとつだけに、以前から授業外学修時間の確保にもこだわっている。2022年度の全学平均で週14.9時間（国際教養学部13.5時間、教育学部18.7時間）。教育学部の4年生では20時間を超えている。退学率は国際教養学部7.1%、教育学部4.0%。

卒業時の学生満足度なども含め、教育に関わる数値をすべてホームページで分かりやすく公開している点でも、大学改革の先頭を走ってきたことは間違いなかった。ただ、入学定員が100人の国際教養学部の定員充足率は、最新のデータで8割強にとどまっているという現実もある。

立役者は宮崎大農学部出身

当時の大坪久泰理事長が次の策として考えたのが、宮崎学園短大の初等教育科で続けていた教員養成だった。注目された大学の次の大きな一手だけに「絶対失敗は許されなかった」と、当時、学長だった永田雅輝さん。その永田さんが教育学部長候補として白羽の矢を立てたのが、国立宮崎大学農学部で同僚だった福田さんだった。

国立大学が法人化を迎えた時期に、永田さんは宮崎大学の研究成果や新技術を産業界に橋渡しする株

株式会社みやざき T L O の社長、福田さんは宮崎大学産学連携センター長。永田・福田コンビと称された過去がある。また、福田さんには、宮崎大学と宮崎医科大学との統合にも関わった経験がある。

永田さんは当初、宮崎大学の教育学部から人材をとも考えたようだが、結局、郷里の福岡に戻っていた福田さんを「手伝ってほしい」と説得して呼び寄せた。「福田さんが非常に教育熱心で、先見の明があることもよく知っていた」と永田さんは振り返る。

100 回を超える特別対策講座も

しかし、教育学部長になった福田さんの道のりは平坦ではなかった。1 期生は教員採用試験の合格者が 1 ケタというスタート。2 期生はかろうじて 2 ケタに乗ったものの、合格率は半分をようやく超える程度だった。

福田さんが進めた対策は多岐にわたる。高校での成績と採用試験に合格した学生の G P A (Grade Point Average = 成績評価の指標) の関係を分析もした。1 年次からの採用試験対策や、特に理科、数学、英語を中心に苦手教科を極力なくす基礎学力強化も考えた。

さらに、2023 年度を例にとると、100 回を超える「専門教科講座」や「教職教養講座」と呼ばれる特別対策講座を用意した。この講座は 3 年生の夏から 4 年生の 1 次試験直前まで続く。そのための外部講師は元小学校長ら 4 人。福田さんが手を尽くし、過去に採用試験対策を専門にする学校で教えていた超ベテランを探しだした。

4 月半ば、今年度の特別対策講座を見学した。毎週 3 回、日中に 2 コマずつが基本だ。すでに 4 年生はゼミ以外の授業はほぼないために、こうした日程が組める。

見学した授業は教科専門の「生活」と「図画工作」で、30 人近くの学生が参加していた。窓の外からはウグイスの鳴き声が聞こえるのどかな日だったが、付箋でいっぱい学習指導要領解説を持参した学生も多く、教室には緊張感が漂う。

講師の過去問の分析は徹底していた。「覚える」ことはもちろんだが、どこが学習指導要領改訂の要点かを理解することで正解が導けることや、「自分の言葉で考えること」が正答につながることも強調されていた。座学中心だが、図画工作の時間には、設問にあるのこぎりや金づちの使い方を実感させるため、講師が学生を立たせて実演させる場面もあった。

この日は宮崎県の教員採用試験の出願締め切りが目前。1 人の女子学生に声をかけてみると、「今はゼミ以外、一日の大半は採用試験対策の勉強をしていて、午後 8 時ごろまで大学に残る」とか。

福田さんによると、大学の学習スペースは午後 10 時まで使えるようにしているという。国際教養学部より多い週当たりの授業外学修時間は、こうした時間の積み重ねということなのだろう。学修時間の少ない学生は学部長室に呼び出すこともあるという。



図画工作の講座では、学生を立たせて実演させる場面も

二次試験対策で生成 A I も活用

徹底されているのは一次試験対策だけではない。

福田さんは、二次試験の模擬授業、個人面接、グループワーク、英会話について、不合格者や補充合格者に徹底してヒアリングし、次年度以降に対策講座をつかった。

出願書類に「子どもに寄り添う教育をしたい」と書いた学生が、「具体的に考えておけ」と言われていたのに考えていなかったため、個人面接で答えられなかった。そんな苦い経験を聞き、出願書類を作る段

階からの指導を徹底したのだ。

「宮崎県の教員になぜなりたいか。『生まれ育ったところで、歴史があって…』などと書くとする。『では、宮崎県の偉人・賢人は?』と聞かれても答えられない。それでは面接ではねられてしまう。出願前の下調べから徹底させる必要がある」

グループワーク対策では最近、生成AIも使わせるようになった。もちろん、誤情報や著作権の問題など、生成AIの負の側面も伝えたいこととなるが、AIを利用した資料を実際にグループで議論させ、優れた発表を共有させる。生成AIの活用には賛否両論があるが、アイデアを出すのに最適の道具であることは間違いないだろう。

たとえば「読書県」を掲げて読書環境の整備や読書振興を進めている宮崎県では、このことが昨年度の二次試験のグループワークのテーマとして課された。テーマは事前に示されており、「県民がさらに進んで読書に取り組める新しいアイデアをグループで話し合い、発表しなさい」という問いかけだった。

シンポジウムや書評合戦をやるビブリオバトル、かばんに本を入れて出かける1 Bag 1 Bookの推奨など、宮崎県のこれまでの取り組みが十分にわかっていないと、新しい取り組みの提案はできない。事前に徹底して調べさせたいうえで、アイデアも数人のグループごとに話し合った。

その結果、あるグループは、幼児でも参加できるように考えた「好きな本、読んだ本を絵にする催し」や親近感を持たせる読書キャラクターの募集、読んだ

本を記録したり、書籍が検索できたりとさまざまな機能を持つ「県民専用読書アプリ」の開発、といったいくつも新しいアイデアを提案した。

このような対策を取ることで、本試験でもグループの中で議論を主導できる。加点と減点の世界だということを知ったうえでの対応策だ。「想定外の話が出て言葉に詰まらないように」という配慮でもある。

このほか、模擬授業対策は個別指導を行い、面接時の態度や言葉遣いなどを学ぶ講座も外部から講師を招いて実施してきた。

英語コミュニケーションの授業では、2つにレベル分けして行ってきたが、外部講師の英会話講座では、試験官との1対1の場面も作って具体的な指導を施した。英検2級取得を目標にさせた。

宮崎市の特別支援教育ボランティアや、宮崎県教育委員会の「ひなた教師塾」にも積極的な参加を促し、モチベーションの維持にも配慮した。

3年生にはアドバイザーアシスタント(AA)を任命する。今年度は国際学部10人、教育学部6人。新入生の履修登録から採用試験対策の助言までサポートしている。

こうした様々な対策の総合的な結果が、合格率100%につながったと言えるのだろう。

英語教育コースでも実績

2023年度実施の採用試験では、国際教養学部からうれしいニュースが届いた。英語教育コースの教職課程受講者からも宮崎県の中学校教員採用試験に2人が合格したのだ。中学校教員の最終倍率は7.9倍で合格者は7人だから、立派な成績と言えよう。

非常勤での採用となった卒業生の中にも、小学校の英語担当に回される卒業生がいるようで、中学校英語教員に採用されても小学校の英語教員になる可能性があるという時代の変化を感じているという。

現在は英語で行う授業についての通信教育も文部科学省に申請中だ。英語教育を武器に、さらに飛躍を図る道を拓く可能性を秘めている。

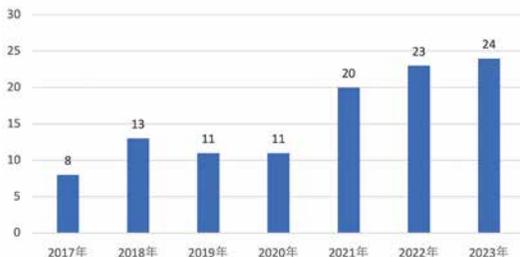


図 宮崎国際大学教育学部の教員合格者推移

「小規模校だからできる」

A Iまで活用した対策について、福田さんは「もともと、新しいものには飛びつくタイプだから。宮崎大学でも（技術者教育の）JABEE 認定にも真っ先に取り組みました」と言う。

そんな福田さんには、宮崎国際大学で、しがらみのない中で一からシステムを作り上げたという自負がある。

「本当は学生の自主性に任せたい。ここまで徹底した対策をとることが本当に良いことなのかとも思うが、自主性に任せていたら100%は難しい。

福田さんは「今回の成功は組織の力がうまく機能したからだ」と振り返る。「まず学生の頑張りがあるし、若手教員の基礎学力アップや教科教育法の教育に関する取り組みもある。さらに、学内外の実務教員と学外講師の教員採用試験対策講座におけるバックアップや協力、そして事務組織の支えがあったからこそその成果だ」と説明する。

そして「重要なことは、対策講座を組織的に運営し、それぞれの評価に基づき改善・運営してきたことだ」という。

また学生が入学から教員採用試験まで「教員になりたい」というモチベーションの維持にも心を配ってきたことが、高い教員就職率（2024年卒業生84%）



国際交流ラウンジには留学生の姿も

からも裏付けられるという。

「小規模大学であるがゆえにできたことで、一つのモデルになるのではないか」

70代後半となってもまだまだ意気軒昂な学部長だった。

福田亘博（ふくだ・のぶひろ）

1946年生まれ。九州大学大学院農学研究科修了。琉球大学農学部准教授を経て、宮崎大学農学部応用生物科学科教授。同大産学連携センター長、副学長。鹿児島大学大学院連合農学研究科、南九州大学でも教鞭をとった。2013年から宮崎国際大学へ。2014年から副学長、教育学部長。



国際教養学部 比較文化学科

英語力が身につく、就職に強い
高・中・小学校教諭免許取得可能

教育学部 児童教育学科

採用試験における抜群の合格実績
小・幼教諭免許・保育士資格取得可能

国際性 全国5位
THE日本大学ランキング2023

小学校教諭
実就職率 県内1位
大学通信大学探生ランキングブック



宮崎国際大学
Miyazaki International University

